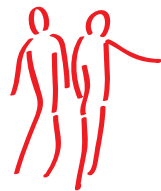


地球研の目的

地球環境問題の根源は
人間文化の問題にある



多様な問題が複雑に絡み合う地球環境問題を解決するためには、さまざまな専門家が分野を超え、ともに研究を進める必要があります。

総合地球環境学研究所(略称「地球研」、英語名「Research Institute for Humanity and Nature」)は、地球環境問題について分野を超えた総合的な研究を行なう、世界的にもユニークな研究機関として2001年に創設され、2004年には大学共同利用機関法人 人間文化研究機構の一員となりました。

地球研では、地球環境問題を「人間 (Humanity)」と「自然 (Nature)」の関係はどうあるべきか、という人間文化の問題として、根本からとらえ直すとしています。分野を超えた学際的アプローチと社会と協働した実践的アプローチから、人間と自然の相互作用環を総合的に解明しつつ、地球と地域における人間のあり方を問う研究を推進しています。

*大学共同利用機関法人 人間文化研究機構は、人間文化の研究に携わる6つの機関で構成されています。

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

- 国立歴史民俗博物館
- 国文学研究資料館
- 国立国語研究所
- 国際日本文化研究センター
- **総合地球環境学研究所**
- 国立民族学博物館

大学共同利用機関とは、個別の大学では維持が困難な大規模な施設設備や膨大な資料・情報を、国内外の大学や研究機関の研究者に提供し、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。

地球研の役割

分野を超え
地球環境の未来を考える中枢に



研究部

研究プロジェクトが所属し、地球研の研究の中心となります。研究プロジェクトの詳細は裏面をご覧ください。

研究基盤国際センター

研究プロジェクトと連携し、実験施設を用いた分析技術の提供、所内外の環境研究に関する情報の集約と発信、環境研究に関わる人材の育成、研究成果発信の手法の開発などを通じて、さまざまな大学・研究機関や社会との連携を図り、地球環境研究の国際的中枢としての役割を果たすことをめざします。

Future Earth アジア拠点

Future Earth とは、持続可能な地球環境に向けて、国際科学会議 (ICSU) など研究コミュニティと社会のパートナーが協働して地球規模の課題の解決をめざす国際協働研究の枠組みです。地球研は、Future Earth アジアセンターとして、アジア・パシフィック地域で Future Earth の活動の展開を推進しています。

実験施設

地球研には、国内では数少ない安定同位体質量分析装置を中心とする多様な実験施設が整備されており、人間と自然の相互作用を解明するための礎となる計測・分析を行なっています。



地球研を知る

成果の発信と
社会との関わり



■ 刊行物



地球環境学事典

地球研の地球環境問題に対する考え方と研究成果を発信しています。

地球研叢書

地球研の研究成果を一般の方々へわかりやすい形で紹介しています。

ほかにもさまざまな刊行物を発行しています。詳しくはホームページをご覧ください。

■ イベント



地球研市民セミナー

研究成果を定期的に関わりやすく紹介しています。

地球研地域連携セミナー

地域特有の問題を、各地域と連携して議論します。

地球研国際シンポジウム

国内外の研究者を対象としたシンポジウムです。

地球研オープンハウス

地球研の施設や研究内容を一般公開しています。

■ その他

環境教育

大学との連携協定に基づく大学院生の受け入れのほか、京都市青少年科学センターが実施する「未来のサイエンティスト養成事業」、文科省の推進する「SSH (スーパーサイエンスハイスクール) 事業」などへの協力、地域の小学生への授業など、次世代に向けた環境教育に広く取り組んでいます。



施設見学

施設見学を随時受け付けています。(要事前申込) 申込方法はホームページをご覧ください。

Twitter, YouTube, Facebook, iTunes Uなど各種 Web媒体にて情報の発信を行なっております。詳しくはホームページをご覧ください。

<http://www.chikyu.ac.jp> 地球研



地球研は京都市北部、すぐき菜が名産の上賀茂にあります。



ACCESS

地下鉄丸線

京都駅→(20分)→国際会館駅→京都バス40系統「京都産業大学ゆき」または50系統「市原ゆき」または52系統「市原経由貴船口・鞍馬・鞍馬温泉ゆき」(6分)→「地球研前」バス停下車すぐ

京阪沿線

出町柳駅→叡山電車鞍馬線(17分)→京都精華大前駅→(徒歩10分)→地球研

上賀茂方面より

京都バス32系統、34系統、35系統に乗車し、「洛北病院前」バス停下車徒歩10分もしくは、上記に乗車し「京都産業大学前」バス停下車後、京都バス40系統「国際会館駅ゆき」に乗り換え、「地球研前」バス停下車すぐ

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4
TEL. 075-707-2100(代) FAX. 075-707-2106
<http://www.chikyu.ac.jp>



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
Research Institute for Humanity and Nature

このリーフレットは再生紙を使用しています

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
Research Institute for Humanity and Nature

2016

ちきゅうけん

地球研の研究 2016年度(平成28年度) 研究プロジェクト



エリアケイパビリティー プロジェクト 2012年度～2016年度



プロジェクトリーダー 石川 智士

東南アジア沿岸域における エリアケイパビリティーの向上

地方再生・地域活性化と環境保全を両立させる鍵は、適正技術の利用による住民参加型の資源管理です。本プロジェクトでは、地域住民組織による自然資源の持続的利用と管理を可能とする条件群をエリアケイパビリティーとして定義し、日本とアジアの沿岸域での成功例を精査することによって、エリアケイパビリティーの評価方法と導入ガイドラインの作成を進めます。

主なフィールド：東南アジア沿岸域(タイ・フィリピン)、石垣島、三河湾沿岸域

砂漠化 プロジェクト 2012年度～2016年度

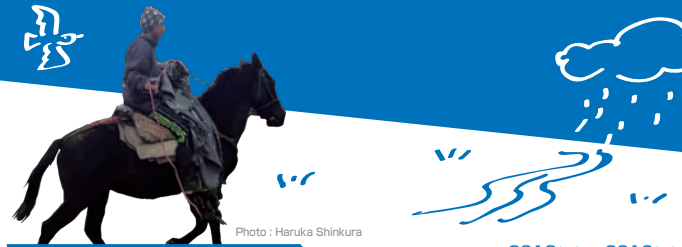


プロジェクトリーダー 田中 樹

砂漠化をめぐる風と人と土

アフリカやアジアの半乾燥地は、資源・生態環境の荒廃と貧困問題が複雑に絡み合っています。わが国を含む砂漠化対処条約(1994)の批准国には、問題解決のための学術研究と社会実践の両面での実効ある貢献が長らく求められてきました。対象地域の風土への理解を深めながら、日常のなかの生業活動を通じて、暮らしの安定や生計の向上につながり、同時に環境保全や砂漠化抑制が可能となるような技術や取り組みの道筋を、地域の人びととともに探ります。

主なフィールド：西アフリカ(ニジェール、ブルキナファソ、セネガル)、南部アフリカ(ザンビア、ナミビア)、東部アフリカ(タンザニア)、北アフリカ(アルジェリア)、南アジア(インド)、東アジア(中国、モンゴル)



地域環境知 プロジェクト 2012年度～2016年度



プロジェクトリーダー 佐藤 哲
共同リーダー 菊地 直樹

地域環境知形成による新たな commons の創生と持続可能な管理

生態系サービスの劣化などの地球環境問題を解決するには、地域の实情に即したボトムアップの取り組みが重要です。地域の人びとによる取り組みの基礎として、このプロジェクトでは科学知と在来知(人びとの生活のなかで培われてきた多様な知識体系)が融合した「地域環境知」に着目します。世界各地の事例を収集分析し、地域環境知が形成され活用されていくメカニズムの解明と、それを生かした「順応的ガバナンス」のあり方を探求します。

主なフィールド：屋久島、知床、石垣島白保、宮崎県綾町、フィジー、アメリカ領ヴァージン諸島、フロリダ州サラソタ湾、マラウイ湖

環太平洋ネクサス プロジェクト 2013年度～2017年度



プロジェクトリーダー 遠藤 愛子

アジア環太平洋地域の人間環境安全保障 —水・エネルギー・食料連環

本プロジェクトの目的は、水・エネルギー・食料の連環(ネクサス)による複合的な地球環境問題に対し、環境ガバナンスの構造と政策の最適化をとおして、アジア環太平洋地域の人間環境安全保障を最大化(脆弱性を最小化)し、持続可能な社会のあり方を提示することです。そのために、科学と社会の共創のもと、ローカル(地域レベル)での行動様式の変容とグローバル(地球レベル)での地球環境問題を解決するための枠組みをつなぐ、ローカル・ナショナル・リージョナルレベルでの環境ガバナンスのあり方の提示に挑戦します。

主なフィールド：日本、フィリピン、インドネシア、カナダ、アメリカを含むアジア環太平洋地域

小規模経済 プロジェクト 2014年度～2016年度



プロジェクトリーダー 羽生 淳子

地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性—歴史生態学からのアプローチ

経済活動の多様性とその規模、長期的持続可能性は密接に関係しています。本プロジェクトでは、考古学、古環境学、人類学、生態学、農学などの立場から過去と現在の事例を検討し、地域に根ざした食料生産活動がなぜ重要なのか、また、それを機能させるためには何が必要かを考えます。その結果に基づいて、社会ネットワークに支えられた小規模な経済活動とそれに伴うコミュニティを基礎とした、人間と環境の新しい関係の構築を提唱します。

主なフィールド：東日本、北アメリカ西海岸を中心とする北環太平洋地域

気候適応史 プロジェクト 2014年度～2018年度



プロジェクトリーダー 中塚 武

高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索

気候の大きな変動に対して、歴史上の人びとはどのように適応してきたのか。また、その経験はこれからの社会の設計にどのように生かされるべきか。本プロジェクトでは、縄文時代から現在までの日本を対象に、高分解能古気候学の最新の成果を歴史学・考古学の膨大な知見に結びつけ、過去のさまざまな時代に起きた気候変動の実態を明らかにするとともに、気候変動に対する社会の適応のあり方を詳細に解析します。

主なフィールド：日本



栄養循環 プロジェクト 2015年度～2019年度



プロジェクトリーダー 奥田 昇

生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会—生態システムの健全性

栄養バランスの不均衡が引き起こす流域の環境問題と地域固有の課題をともに解決するにはどうしたらよいか? 私たちのめざす流域ガバナンスは、地域の自然の価値を見直し、住民が協働して、その再生に取り組むことから始めます。活動の参加者は、地域の価値に共感・共鳴した瞬間、「しあわせ(Well-being)」を実感するかもしれません。また、自然再生によって生物多様性が豊かになると、それ自身の「栄養循環を高める能力」によって流域の栄養バランスが回復するかもしれません。地域の課題を解決することと流域の栄養バランスを回復することが両立する—そんなガバナンスを実践しています。

主なフィールド：琵琶湖流域、フィリピン・ラグナ湖流域

FEAST プロジェクト 2016年度～2020年度



プロジェクトリーダー MCGREEVY, Steven R.

持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築—食農体系の転換にむけて

本プロジェクトでは、日本、タイ、ブータン、中国を調査研究地として、食と農を持続可能なかたちへと転換するために必要となる実証データの収集やその実現に向けた実践的研究を行ないます。食の生産と消費は社会や文化に深く埋め込まれています。未来の食の供給を構想するとともに、地域の食と農の未来を考える委員会や、地域の食の経済を支えるしくみ、食と環境を結びスマホアプリなどを新たに設立・開発します。

主なフィールド：日本、タイ、ブータン、中国



プログラム—プロジェクト制

- 地球研では、既存の学問分野や領域で研究活動を区分せず、「プログラム—プロジェクト制」によって総合的な研究の展開を図っています。
- 地球研の研究は、プログラムと呼ばれる大きな区分で分けられ、各研究プロジェクトはそのプログラムの重点課題に沿って研究を進めます。プログラムは、実践プログラムとコアプログラムから構成されています。

実践プログラム プロジェクト

地球環境問題のさまざまな課題に、社会における協働実践を通じて取り組みます。

コアプログラム プロジェクト

実践プログラムと連携し、地球環境問題解決のための理論・方法論の確立に取り組みます。

- プログラムのもとにある研究プロジェクトは、研究テーマごとに2～5年の期間で研究を行ないます。研究プロジェクトは公募によって広く研究アイデアを募り、さまざまな段階と審査を経て立ち上げられます。
- 2016年4月現在、8つの実践プロジェクトが実施され、コアプロジェクトは準備が進められています。



Photo: Tomohiro Oh